

塵点録

五十五

049
ア3
55



品目
書目
文書課

寫吳軍玄黃以案台

本朝文辭粹 神化之使

和論性 紅水軍談

雜之推選 甲防軍錄亦疑

之國志 元州軍統五粹

塵點錄 接粹

五十五

A04
73
55

A049
73
55

布朝文粹 按粹ト曰 神仏ト 和漢語
 布朝字系浪華抄 方次軍儀 雜ト 拾遺
 通俗之國志 通俗之軍儀 通俗續之西志
 甲陽軍鑑辨疑 日平新脚之集

塵點録 抄録字ノ多キト本号トシテ
 了ラズ字ナシトモテ字ノナクテ下
 咳抄

史系之重
 史系之重

神武紀云時稚根津彦出計云先遣我女軍出
 忍坂道虜見之必尽銳而起

推古天皇辛酉九年春三月太子始市使高買知賣
 買街上云、誓テ蛭子神為高賣鎮護神後世以
 惠養須宗福德神自是始焉

推古天皇十二年四月聖德太子親作憲法十七條
 本朝法令之始也

孝德天皇三年丁未詔定葬法禁殉死之徒

知縣文
 昭 33.7.30
 40300

詔畧曰凡自畿内及諸国等宜葬地於定一所而收埋不得汗穢散埋如凡^ル人死已之時若經自^ラ殉或絞^ク人殉或断^テ髮刺^サ股而誅如此旧俗一皆悉断焉

○同五年己酉正月始行正月朔且朝賀

○天平宝字二年詔天下停端午賀慶

先帝ノ登遐ノ日ノユナリ

○桓武天皇延暦二年夏六月新規ニ道場ヲ建テ寺

堂ヲ營作シ田地ヲ寄附スルヲ禁ス

○延暦十年八月盜燒伊勢内宮宝殿取宝物

○嵯峨天皇弘仁三年四月禁僧入尼寺尼入僧寺

○弘仁十一年四月大納言藤原冬嗣奉^テ勅^ヲ撰^ス弘

仁格式書成テ冬嗣作^レ序 其畧云

暨^ニ干推古天皇十二年上宮大子親作憲法

十七條^ノ国家制^ニ法自茲始焉降^テ至^ラ天智天

皇元年制^ニ令二十二卷世^ノ人所謂^レ近江朝

庭之令也爰逮^テ文武天皇大宝元年贈大

政大臣藤原朝臣不比等奉^レ勅撰^ス律六卷

令十一卷養老二年復同大臣不比等奉^レ

勅撰^ス律令各為十卷今行^レ世^ニ律令是也

○同序云遭_ラ時_ニ過_シ密_ニ覆_{マシ}而不_レ為_ス

○淳和天皇任遺_ノ詔_ニ以_テ骨_ヲ碎_{レテ}粉_ニ散_ス大原野

西山ノ嶺上_ニ

遺_ノ詔_ノ畧_ニ云_ク予聞_ク人_ノ没_シ精_ニ魂_ニ歸_ル天_ニ而

空_ク存_ル冢_ニ墓_ニ鬼_ノ物_ヲ憑_リ焉_ニ終_ニ乃_レ為_シ崇_ニ長_ニ貽_ス

後_ノ累_ニ今_ニ宜_シ碎_レ骨_ヲ為_シ粉_ニ散_ス之_ヲ山_中ニ

○伏望_ク隨_テ人_ノ品_ヲ列_ニ定_ニ衣_ニ食_ニ之_ヲ製_シ命_ニ檢_メ非_レ違

使_ニ糾_メ之_ヲ以_テ張_ニ格式_ヲ

三善清行意見封事ニ出ツ本朝文粹ニ載レ之

○仁明天皇承和十一年藤_ノ貞_ノ主_ノ卒_ス每_ニ好_シ酒_ニ雜_ニ務_ニ

積_ル累_ス屈_レ倦_シ飲_シ酒_之興_ニ不_レ曾_レ休_レ醉_レ後_ニ弥

明_ノ割_リ斷_ル如_シ諫_ニ貞_ノ主_ノ園_ノ主_ノ子_ニシ_テ叙_シ四_位

任_ニ近_ニ江_ニ權_ニ守_ニ

○竜田明神託言曰人之兩親_ハ即是_レ内_宮外_宮

之_ノ神_ニ明_也汝_等不_レ善_シ事_ニ之_ヲ而_レ祈_ル求_ル於_レ外_ニ乎

三_ノ寫_シ明_ノ神_モ亦_レ言_フ人_ノ家_ニ不_レ論_シ貴_ニ賤_ニ必_レ有_リ内_外

兩_ノ宮_之神_ニ在_リ若_シ能_シ事_ニ之_ヲ崇_メ敬_ス莫_ク所_レ不_レ尽

則_レ天_ノ神_地祇_日夜_ニ降_リ臨_ミ其_ノ家_ニ

○文德天皇齊衡元年備前国献_ス妖_ノ僧

米糞聖人也

同三年十二月始用五繼曆經

曆博士大春日朝臣真野麻呂奏曰云

○二条后清和陽成ノ母公也東光寺僧善祐相通

既癸覺ス係善祐於伊豆皇后廢位五十五歲

○貞觀二年以十一月二日丁丑為朔且冬至

○同六年二月定僧位

眞法印位為僧正階法眼位為僧都階法

橋位シ為律師階ト

○同十七年正月冷泉院災勅募四方人有功者

以布賜之大原雄廣麻呂拒火燒死

應和二年榜列金龜古洞山干觀死ス常會ニ徵

笑シ世人見テ遺像シ稱ス笑佛ト

幹縁ト疏ト俗ニ云ハ加ハ悵ナリ

清原賴業六十八テ死ス後建祠於嵯峨号車裂神

菅為長與親四雨逢干莊嚴院園白道長曰菅公ハ

兩漢

本朝大儒常含ニ親ク壓シ儒今西ノ雄相遇何有シ

常話乎云曰菅公從ニ事ニ儒術是否為

長曰然ル云我法之中併々授レ手祖々相傳フ

不レ回師兼為ニ虛設焉故某自レ世尊五十五世

達磨已來二十七葉大凡之末力雖不拂然

鴻毛猶以系受稱親子以親例佛亦當然

也不知公於孔子幾世乎為長不答退而謂人曰我欲與爾角道義彼以世系而言故余且箝口而已

羅浮子有論畧之

元亨叙書之立傳則于司遷之史記其度物論者則于易繫辭其次資治表者則于春秋其凡例者則于左公穀其志者則于兩漢書建治元年僧一遍始用時宗

遍字知真仔列之人河野七郎通廣之二男也初在俗家極富遍有二妾一日並枕書寢時兩婦之髮髻忽化二蛇一喰一良

久遍見大驚拔釵斷之忽發菩提心云

○正治元年五月律宗之祖俊蒞入宋

蒞字不可棄肥後国飽田郡之人也赴宋求勝法若不精勵豈堪傳授乎我誠志操始去冬十月十日絕眠精座使徒三十人結為六番置一杖子約更我有睡眠時以杖撞醒歷期无怠眠所食禪杖屋角塵深身无少惱目精亦不有患

○曆應三年十一月尊氏重遣細川顯氏山名時氏擊楠正行正行逆戰住吉安部

野ニ大ニ敗ル京兵

楠之麾下和田源秀阿間了願各横長鎗於馬首從横馳突云是戰場用鎗之權真也

將軍義持一日遽到仁清叟之菴請侶驚周章ス一体偶在菴持帽子出迎義持立砌下赤松越前守侍旁時越州歲十五天下之羨童也体立屋簷上欲度與帽子於義持越前進テ出手執帽子休乃握其手戲也云從者皆曰自非禪者殆不可有此舉義持亦感禪

子ノ不碍

貞永元年春正月高雄明惠高辨死始於東大寺受具寺内有聖詮者善賢首宗請益日新云止北山梅尾盛唱賢首宗師鍊カ曰中也以來賢首宗不振矣高辨以純誠之質立鑽仰之志見其稚操之激勵宜哉中興之利器也後花園院長祿二戊寅正月二十九日兩日現閏正月二日滿月出同三年卯六月二十日兩日並見寛正元年正月朔日三日並見

印貴氏賤 出前漢食貨志

右靈禪師 神贊頌 曰百年鑽故紙何日出頭時
彩鳳隨老鴉 言貴人隨賤人之意ナリ

資治通鑑網目者網是朱晦菴取筆也目是趙訥齋
名師測字幾道 筆也 傳在國書

幸字脚羅沙石上種油麻 磨ノ分ケ字

普化 五灯并三 盤山宝積カ弟子也宝積死スルトキ諸弟シ

集テ悟道ヲ試ム諸弟不能言時普化抄翻筋斗シ

守勝ノ云ク筋斗ハ日本ニ云トシボカヘリ也

米克袖克 日本ノ放鷹師也 百濟ヨリ来ル齋頼モ此ヨリ

傳フ

○滕曇恭孝アリ冬日母欲食衣曇恭至孝而求衣未也

事文

○白兩映寒山森々如銀竹 李白 白氏文集ニ白兩ヲ

ムラサメト訓ス銀竹ハ兩足ナリ

○明歷々 露堂々 禪語

○見桃而悟道 靈雲志勤禪師 五灯四

○拘律陀之孃之鬼 拘律陀ハ目連也孃ハ母之

○隔是ハ已是也 白氏文集ニアリ唐ノ諺

○住近孔堂蛙呼子曰王梅溪

○江少微通鑑節要續編ヲ作ル者ハ劉剡也

○癡絶和尚 名ハ道冲 清拙ハ名正澄

官班記一冊 尊田作法中官位ノ事法中ニテハ大僧正ヲ
大納言ニ當ツ公家ニテハ宰相ニ當ラレ

世継七卷尾州大守ニ卷本アリ古筆也袁ニ真字ニテ
註アリ

長門国赤間関阿弥陀寺ニ平家物語アリ常ニ平家ヨリ
多ニ阿弥陀寺ハ安德天皇ノ寺ナリ

俱舎ニ云々天衣拂フ石ハ拂石劫也
採菊東籬下悠然見南山 東福寺ノ閑山聖一國師ノ点

杜詩十六有題ニ白少詩林函三曰日本ニ取愛食白魚是也
二十四孝ハ元朝郭居業取作也

參同契 サンドウケイ 朱子ノ註アリ 空同道士鄒訥註トアリ 朱晦菴

別號也

晝夜鐘ヲ撞ニカスアル事五車板錦ニアリ

家康久ハノ字ト云補腎ノ丸藥アリ是ハ醫林集要ノ内ニ

无比山藥田ト云方アリ是ニ脛臍ヲ加ヘタルモ也 道春諾

吉田兼俱与横川禪師同時也兩人同心メ曰ク天ノ七星
カ横川ノ前ヘアマクダリ神道ヲ横川ト兼俱トニ傳ヘタリト

云リ此事ヲ空竹ノ記録ニノセラレタリ
又兼俱カ曰中臣拔ニツノヨミアリ 拔スレハハヤク神心ニ

叶フニヨリナカトントヨム也又富貴ヲ祈ル拔ノ時ハナカトミト
ヨムナト云ヘリ

○梶原性全 日本醫師万安方五十冊作ル鹿苑院義

滿ノ袖判アリ達仁寺ノ大統菴ニ有_ニ此醫書或時醫玄治法

印買取銀十枚性全又作_ニ頓醫抄在_ニ江城公方御文

庫_ニ煩ノ字ノ訓ホトシルト付ルモ此人ナリ

○記里鼓 詩中有_ニ鞞人字考工記ノ字又有都曇荅臘之字日

本ノ猿樂ニダウク夕ラリラト云此字也詳_ニ在_ニ韻府臘字

條下_ニ

源經基為_ニ八尺_ニ童_ト住_ニ西八条池_ニ云_ニ此所今為_ニ律院

源_ニ經_カ云_ニ偽_ルト_レ也_トも_レ是_レわ_ルハ_レリ_トリ_ノ御_ル。是_レも

ソ_レも_レ是_レる_ニハ_レ偽_ルリ_ト人_ニ此境_ニ入_ルト_レも_レハ_レ勇_ニ家_ト也_ト

又_レを_レの_ニ母_ト也_ト也_ト

源_ニ為_ニ義_カ云_ニ人_トト_レハ_レ御_ルと_レの_ト親_トト_レ子_ト次_ト

た_トト_レ親_トト_レ子_トト_レと_レも_レ御_ルと_レの_トハ_レ敵_トと_レは_レ

此さうしよ迷ひぬ色ハ形さるらうとも昔かへ

八世太府義家ノ四男ナリ

源義康身長七尺五寸八十人カカとき生二王と号ス

三十一歳ニテ死ス新田足利祖常カ先生源義家三男ニ

右大羽名縁母号王子日本一ノ美人也

氏ア可肩云かま川さハ必吾祖とのみふと知色ハ恨は

志のりくハ必忍るるものとしハ敵といかり分

権中納言定家ハノ女ナリ

友子云侍ハ偽り多く人々々惣我盗シモ慈悲の心き

とも勇勢五ルとくハた之百勝ありテ併の心とくは

聖賢の行とありても勇あきハ女ニ考リ是我知ノ要カ

海井飯茶古者系古故ノ女ニ系孫言汝ハノ室お忠言の信

母ノ号ニ常光院ト

○ 義徳彦大明神々魂 義徳玉

皆人の志キ心ヲそ候ニ非の非言非の非あり

以佛奇ハ字女帝の佛子敦実親王に名申ニ告は

句り四非の佛奇と云是ナリ

○ 兵主大明神々詭略ス 吾伎國

○ 從三位中納言云云山蔭口

正二位左大臣魚名公ノ四世正四位下高房の孫ノ二男ニ

本知包丁之盪觴ナリ仁和四年二月四日卒ス六十五歳
武畧ノ達人也

淡泉村尚知良云今の世の人能くわきと學文シスレバ
を心ひびぐも多クハ字のぢふひぢふにとどむる今學文者の
字のぢふひぢふ稀と大方ハ無智なりわきも乃か非學
者の中ニ字のぢふひぢふをわきとより好む世の人を考へ
んぞ

大史吉柯知良八世大外記良業ノ男從四位下大外
記長門權守文永元年七月十一日卒ス六十九歳
右藤房ト云ニ生シ至言多シ其書号天鏡記今此

一勾依シ不レ載セ彼書ニ記ス之シ

○源義兼ハ義康ノ男号足利ト從四位下八条院在
人母ハ磐田範忠ノ女正治元年三月八日卒身長九尺
み寸日本无双ノ大男之号駿河守

○源光盛ハ義盛ノ二男位上侍守文永七年蒙
勅命江州伴吹山ノ大蛇ヲ殺ス長十間蒙所感從位
位下昇殿兼賜瀆裂延喜元十二月卒ス字七身長六尺九寸

○仁と弟と勇と云々ト大外ハ火ニサヘモ不水ニ溺レス
是ハ楠正成ノ勇猛ノ本奇トモ思地と和田七郎正成
并にわらへしと一戦勝の夜母と名付しと付てと云々ト

と云ふ事なりと云ふ事なり
源氏経云士の六具して佛非とも相せぬといふ。祥
き色ハ士の勢と夫の事と多き多嫌の事と敵と討と佛
佛二乃の人三回と云ふ事と是れ我ハ權の及る事なり權と
者と能く不毎一夫おハる事と不^{カハテ}知^ル事と

斯波尾張守家貞男位下尾張守修理大夫引舟頭
人貞治元年七月卒ス 管領ノ始ナリ

源貞世云人ありたき所と物か多可の起^キ外^ニモありの候ニ
恐^キキ主人もろく何ともなきをひらく事ありし程と云ふ
今の世を何所と上つことありし事多し即ち是れを食

境界之人の政タルモノ人の原タルモノ天下即ちけりこの
く己方候と樂メルトヤアル候と海多事とナリ

今川右衛門國二男三右位下守法名三俊歌人為秀
口ノ才子ナリ

○源義藤公云 後改義種 人衆と白ひておひし^ニ筋ありとて
ふ^ニ至^ル事^ニは^レ後^ニは^レい^ハし^テ何^レも^レも^レ守^レて^レ候^レ事^ハ已^ニに^レあり^ニ
怒^リ移^リテ物^ヲ失^フ事^ハ多^ク必^ズ不^レ可^ク救^ス

○平貞孝ハ伊勢傳中守位下貞忠男之号伊勢兵衛助
永祿元年九月十日於長坂討死実ハ貞時ノ次男也

○平貞良云 一の逆物と誘わると多し行と云ふ事人ハ

海島とて此の傷者といふものどバ物よき坊を云
傷者といふ屋より今此の出家を出家と云一既ニ毒ノ
火宅ヲ出せぬとこそ出家といふべきにこそ大徳に
なる也此の傍の事なるも悪疾ノ三毒の出家に入人ナ
入家と云一と云、

伴物と云長真孝勇也永禄五年九月十日於長坂山討
死

坂元 天皇四月内裏ニ奉文て後方の長三尺半の
小男ワグくともあく事りて四月ノ交シ守り居たり長真さ
めて何者といふ由一と人ともあき如ニ皇子をシテ
め

あふあふも出て彼小男あぐびして明日雨降下イハ
皇子マゆまひて鶴鷹ハ凡シいふ野干ハ多と愁とあ
まハ海ハ狐句んといふ一と作一と云ハ小男と云くと
句りて矢り

。乃真カ云長老西堂ノ号ハ官位ハ所バ依依ニこの称号
句りに法堂ニ云と云ていり句り貴人とも云ふと云く
中々今此の出家ハ長老といふも是依る者句り是ハ四位又位の
殿上人とも悉皆己カトシ海のものともみるこそくそくそ
人鏡端ニ云と云一と云云金物終あも世のあはれ
乃真ハ雲白房嗣公ノ二男大僧正を護院新徳野ノ

検校

仁者と律師澄修ハ一生不犯ナリ或時母の疾あり

物ヲとりてけし心ニカリ右ノ手ヲ切テ捨ツ弘法夏中ニ

云ク末世ニ生じても大及人ナルニみ辨不具ニハ時ハ終り

もラタカ所ニ人となすと覺て居るあぬえれハ心

とくにして居るぬ家ハ何れや父老て黒ニシテ

物去つたハ茶方書ことハ各別ニ弘法の事終り違

つ波切乞勅ヲ蒙り一子巻ノ心經ヲ書テ野山ニ納ム

○良怒法親王云々代何て人の能りあて武田信玄と良

おありと。是れおニアラジ本漢智仁勇ノ三相ヲ以てハ

いふ人君才一の孝ノ及ぶる者いれは良おと

出家の佛一代の親ヲ空ニとくとも礼行アラハ是ヲ出家と

せんや

陽光院才三又号竹内津の娘母准之后原系晴宗乃

公ノ女

○徳ハ大納云々系仲磨ノ九男号徳一菩薩全カマテ

レ今終不火壞云々

○寛憲カ云々系よく毎へ云々云々書物と畧して書ク

人ハよくぬわぶ物ヲ書記ニ定とハ其のきよ妙一何り

からん人もよく毎へ人と救ふ便りある文字ヲ畧之意と

省キテ書こと^御とそ^経知ラシテわさ^はし

○法^キ圻ハ今川四郎源基氏男也^必覺寺續燈菴号ニ
佛^法禪師ニ一生不卧ノ人也

○華叟曰ク今世の僧いろく^魚名^の假^シル^綱味^として
食スル^ハよろ^くね^と之^魚名^ノ假^ル程^内之^忍忍^スナ^ラス
中^ニそ^物と食^シタ^ラニ^罪ア^ラニ^トコ^ソ之^又ル^ナリ

江州住居宇多源氏佐々木但馬守國高ノ子ナリ

○无住カ云ク道世の迹ノ字ハ海代^ニりて書^啓ユ^ニ首^ハ道^ト
書^ナリ^今ハ^貪ル^ト書^クニ

長母寺ノ岡山号ニ一四^ノ近代ノ智者也一生不卧ノ人ナリ

十八歳ヨリ不犯ノ道人

○源達カ云ク此の由教ハ法ヲ賣リ佛ヲ見セ^レル^ハガ^リ
日^夜の^盡スル^ニ序^腹痛^ミテ^笑ム^所原^今分^後六^尺路^ニ
佛^ヲと^ク坐^禪ヲ^とラ^シテ^分句^ノぬ^人も^多ク^支又^佛の
功^徳ヲ^とク^の菴^ニ満^ヌベ^キツ^ミビ^トス

宇多源氏年^五男延曆寺執行号^星
輪院僧正^ト

○飛基信口云今世ノ学者皆人の為^カシ^テ己^カた^めみ^セ次
故^ニそ^人ヤ^人句^ノ度^シテ^考す^海の^者ニ^啓ズ^却リ^テ考^ス海^の
者^ノハ^移ら^けて^おぐ^度シ^キ方^ヲみ^え侍^ス

持明院基繁ハノ男之文明元六月十五日卒

○中納言基國ハ園中納言基富ハノ男也文明十年九月六日卒ス六十五才也生身ノ年才天逢ト宝珠ヲ
於テ富貴自在ノ人慈悲ハ一ノ口ナリ

○源重保初名云年号秘事ト云ト世ニたテ知人ハ
たゞその天子の御名トめて之ハ世ニその年ト云ル
是非傳の要事ト今の人々ハ知ル之ト秘シテ人ニ傳フ所
是ハ源氏ノ御名ト云ル之ト秘シテ人ニ傳フ所
是ハ源氏ノ御名ト云ル之ト秘シテ人ニ傳フ所
是ハ源氏ノ御名ト云ル之ト秘シテ人ニ傳フ所
是ハ源氏ノ御名ト云ル之ト秘シテ人ニ傳フ所

字五源氏庭田參孫重保ハノ男也

○雅親ハ飛鳥井大納言雅清ノ男正二位大納言文明
五年三月初出家法名崇雅歌人也

○友基國ハ云皆人の賢キヤクみテおろク知ル之ト多ク者ハ非ハ明カ
授テ不知シテ知ル之ト入ル之ト天ノ事ノ周知と不知シテ知ル之ト
是ハ源氏ノ御名ト云ル之ト秘シテ人ニ傳フ所
是ハ源氏ノ御名ト云ル之ト秘シテ人ニ傳フ所
是ハ源氏ノ御名ト云ル之ト秘シテ人ニ傳フ所
是ハ源氏ノ御名ト云ル之ト秘シテ人ニ傳フ所

園正二位基富ハノ男也傳出ル前

○友隆ハ繼ハ油小路大納言隆基ノ男之正二位中納言天文
四年七月七日卒ス八十八歳蒙リ勅詔以采字書ニ與フ
祓家ハ公武ノ人殺八千七十五人云、

○夜兼俱カクテ神乃佛仏傳乃是一神のみなり
如し正統經に在のけふこおめてハ多ク其正の言とた
ぬる是ハ由家傳家のとの神氣と憚カルハと云ふもの
心多所之今の世の神乃を学ぶ者けと有りこくして
一向テ其佛乃の教とを嫌り是吾神明廣太極道也と
くくく知るざる不有りおとせり

孝田兼近十七世正三位神祇大副兼名口男也從三位
神祇大副

○源通勝口云云家ク奇クも其武家ク弓引候其外乃
のもの家業とせねとバ何カセ野に焼て松のやうのみ

こそうらまは松ハ人の骨とめて味せり

村上源氏中院通右門男之法名也足又素然

源經基ヨリ茲ニ至テ和論語ニ見ニ和論語ハ十卷

アリ 代々撰者次第

兼久元正月十八日 穀倉院而高清原良業

在判 以下共ニ在判也畧ス

建長四年八月十五 大外記清原朝臣相尚

弘安十年二月廿日 穀倉院而高清原良季

元徳二年九月十九日 曰 而高正四位下清原良枝

曰降宇勢弁 四代侍讀清原朝臣宗尚

文永四年十月廿五日

主水正清系初良兼

文永二年三月十日

大膳大夫外記清系字季

同日

少納言大外記清系良賢

文安三年八月朔日

少納言大外記清系利季

寛正六年十月十日

大外記清系初良字兼

長亨二年七月廿九日

大外記清系初良宣

永正二年四月十日

正三位行大内少輔清系字賢

天文十三年五月三日

從四位伴左少将大外記枝賢

同日

少納言清系初良宣賢

永祿十二年十月廿五日

細川左将左衛門源成孝

寛永五年八月十五日

從四位上右中将源重秀

洛東山隱士長嘯

○ 武備志 吳國ノ書ニ倭書ニハ志孟子ノアルハ裔於上人我今書ラ

後セシクノを聞ナルニ學令ニ孟子ノト見之近ニ此の
大學令式ニモ亦无之今已知其謂テ耳

○ 淳和天皇ノ御諱ヲ避テ大伴ヲ訓ニ止毛一己尚シ
俗間ニ唱一來ル年号善紀正知教到僧聽。明要

○ 遺樂等ノ類麗氣記抄ナドニ有之不知其所シ

武難書二年号ノ始ハ武烈帝ノ所善紀アリ欽明十
三年ヲ貴樂元年ト記シ又ハ智沙太子ハ金光三年ニ誕
生倭童四年二月五日ニ薨スナド記セリ後捕ノ真倭抄ニ
天平感宝元年此レ年中改元ト号ス仍不載某代曆
此年号有ニ万葉集ニ云、由是觀之年代曆外間見ヘ
タル年号ハ年中改元ニメ天変地妖等ノ厭勝假リ建タル
者ナラシカサレバコソ万葉集ノ外卒ニ歴史正紀ニ未見レ之
○淡海三船奉勅神武帝已下代々ノ帝王ニ謚
号ヲ撰シ奉ル 叙日本紀
○渤海ハ百濟ノ後ノ国号也云、

○叙日本紀電云、加摩度ト梵語也ト云、リ加旃ス魚ヲ
云ニ摩那姐云ニ摩那伊太類皆是梵語尼
云ニ阿摩弓云ニ多羅技亦同シ或云加摩度
又ハ魚ヲ摩那ト云ハ梵語ニ非ジ阿摩ハ梵語ニシテ
母ノ稱を居ノ事ニ非ス又多羅技ハ神功皇后ノ
御名ニシテ弓ノ号トスルハ秘ナリ主人ヲ檀那ト云ハ
梵語ナリ

○叩頭

○千字文ハ梁周興嗣カ所韻也汪四如ト云者其ノ
文字ヲ五体ニメ為五体千字文也其後又有ニ万

字文之作近世又清朝に至り百体千字文ヲ
作り卷首ニ韃靼ノ国字ヲ載ス其字体梵字ニ
類セリ

○真名トハ云フ天去名義ヲ非代卷ニ有リ天真名并注
解皆天真誠實自然ノ謂トス物ニ如言ニ真名鶴
モ衆類ノ中ニ一箇ノ真体ナルヲ指メ云ヘル古語ナリ
○万葉集ノ撰ノ時代等ノ異說奇人家ニ巨難トシ
古今集ノ序ニ云ヘル奈良帝ノ一モ文武帝上平城
帝トシ聖武帝トスルノ有リ區々サレ此撰ハ聖武ノ
躬ニ敏著スト也奈良七代トハ元明。元正聖武孝謙

廢帝。稱徳。光仁

○片字書中世已来訓点又ハ出葉字トシ謄字ノ
捷徑ニ用ルルアリ是レ亦片假名ニメ吉備公ノ本
割ニ横メ字ヲ偏旁点畫ヲ省タルモノ也或ハ歌ヲ
哥トシ摧ヲオトシ孫ヲ子トシ從ヲイトシ又禾コ禾コ
心ココ七ナナ刀タチヤヤ与ヨノ類是ナリ

○西域ノ悉曇をモ其妙ヲ尽シ胡僧神拱入漢家ニ以
来其傳ヲ弘ムト也尔ヨリ後漢家ノ韻書汗牛充棟
事物紀原云切字出於西域

○明魏法師ハ以為遠於兄惠ヲ通用セシトナリ

定家口ニ至テ精妙之とソリテ定家口ノ假名キ一卷或
二人丸秘抄と称ス此トク或記ニ云夫レ二人丸秘抄ハ
河内前司親行物后ノ述作之ニ同ク甥ノ定家口ハ
合休ノ物也トゾ仍テ二人丸秘抄と号スルヤ然ハアレト
世以定家ノ假字カキナキワカヒと云傲イヒナシハセリト云、

○いろはイロハよりむムに至りニ二十ニ言勒操作リ之ノ今すイ
至りニ二十四音ハ空海為リ之ノ京ノ一字ハ空澄置リ之ト
其末ノ教負ノ字ハ後人置レ之云、松下見林云空海
並母ノ母字ニハ自リ一二三至ラ万億ニ數字有リ之在
出雲国神門寺カシ

弘仁私記ニ日本紀ノ假名ニ片假名ヲ用此レ書
籍ニ片假名ヲ用ルノ始ナルニ木寄ノ書ニ平假名ヲ
用ルハ古ク集ノ假名序ヲ始ト云キヤ又抄ニ紀
氏ノ土依日記ニハ古ニ字ナヲ男文字と云平假字ガヲ
女文字と云リ

神泉苑 松下氏云壬午年东寺ノ室菩提院ノ下僧
請テ板倉伊賀守ニ遷ニ豊国ノ社塔ヲ又小出淡路守
立ニ海乃天小社ヲ今モ此寺ノ如シ大内ノ旧跡ハ付
成行ハ虫ホ无キ本意トモ民家田畠ト成ニヨリハ勝レリ
仁壽殿ジジデン

侍讀

右吳國ノ書ヨリ此ニ至テ本邦學原浪華鈔ヲ撰
記ス真野時繩作シテ六卷アリ

戸次軍談十二冊アリ彦城散人序也元祿壬午三月

望後日ト云九州事迹ヲ記ス大友宗麟カ親族戸次

丹後守鑑連入道道雪其先祖ハ大友家ト同シ左近將監

能直ヨリ出タリ後主花鑑載シ誅ニテ姓ヲ主花ト改ム此

事跡ヲ詳記ス

賴躬蛭カ小侶ニ諱居ノ時四上野國利根ノ群主大友或

波多野四郎交藤原經家一人ノ女ヲ進ラセテ妾トス或

嬖諂藤原躬出世の母孕メリ所産不嬖奴侍子加ハ女ヲ母院ノ次官

師藤原親能ニ賜リ生シテ小字ヲハ一法條丸ト云母大友友近弟也

能直ト号ス源平藤原ニ因スルカハ大友ノ姓ト号ス権非也

後漢光武帝十二代獻帝ノ末葉ニ阿多倍王ト云人アリ

孝徳天皇大化年中ニ我朝ニ来リ播州明石浦ニ著岸

大藏谷ニ居住ス阿多倍王ガ二ノ子シ貴重王ト云リ是レ大藏ノ
姓ノ元祖ニテ原由波多江秋月原江上高橋此六家
是ヨリソノ別レケル

• 朽網 名字

• 押出ニテ奪ノ名ト云ハ維ニカギル也和泉ノ百舌野ニテ

• 始テ維シトリタルユヘナリ

• 祈荅院 来入院 新納 共名字

• 戸次統直 朝鮮ニ太刀先餘ツテ大石ヲ二ツニ割ル又少モ鉄
損ス是ニ依テ研谷ト名付家室トスト云

茲ニ至テ戸次軍談也尚阿筑後柳川ノ城主立花飛騨守山宗昌
從四位 四品 十二万石ハ則戸次道雪ノ後ナリ

史 武智磨 齋前 磨 字 石原武智磨云々

• 淡海公不比等の長男武智磨是と南家と号ス其次男
式ア口字合と式家の子と云フ三男房茶と小家の友
系と稱ス其男以系妻磨と云フ其の子と名付ク

事代の在成をけり家の流を去るも中人抱瘡を以り
らひて同年より家を去りしより是中の瘡瘡の始と
いひ所よりしるす事とその子孫を以て其の始と
いひ所よりしるす事とその子孫を以て其の始と

● 阿保親王の妹の侍宅内親王と史記あり業平と生スト云
作勢地侍の法又都布といふより業平一代は戯る
女三千余人と有る位にけり其の号統ありとて昔の
奇及者といふ侍ら

● 竜造寺家の日記に凡糸の玉麻カサのたよ法性寺といふ
寺あり同基を俊寛に御座麻札教先の時傍知とあり
是も不便ありとて記すといふ是事麻のたよ位せし
めたり花あて死せしと

● 賢州徳坂大郎長能を在る氏を仁兵衛ハといふ盗賊ス
義安事申源の事ハいふと云長能七の事の時大寺の
虫がしと父と云ふ初んく室の建と盗けしと
傍りけりてれくは是の時長能建とおてころひし
志ありしと云は押さししては自らお建と振れ父お
建とおけてありしと云と盗と云

吾と語りし取崩の故と云ふ一説は先程井の
左大臣の御座りしと云ふ事と云ふ由縁と云ふ説と云ふ故と
云ふ事と云ふ事

● 細川石高が頼朝の父のりとの密あつて主の使務
時敵あり打一や打二と云ふ事と云ふ事ありて
一と云ふ事と云ふ事敵ありて主は仕人しと云
ふ事と云ふ事感伏すと云ふ

徳
● 舟波の佐人毒井惣右衛門七郎重人ヲ切殺ス哉名孫方一
たりと云ふ事と云ふ事

● 田村右軍兼内侍奇術ヲ上後入世んとて吾人等
殿の文庭母並に並流太刀と云ふ事又母墨と云ふ事
振て鞘母おとめ人とりて吾人の首と云ふ事

曹操与陳宮同走成皋一殺呂伯奢曹宮密
使シ我シ負シ天下之人ニ体ヲ教テ天下之人ヲ負シ我カ陳宮
此不道ノ言ヲ聞テ去ル

曹操伐袁術士皆飢曹王屋ニ命シ小斛ヲ用ヒ士
皆怒ルヲ聞テ怒リテ王屋ヲ切テ士ニ謝ス
曹操伐張繡ニ曹馬馱テ麥ヲ損ス曹以爲シ法吾
ヨリ出テ吾犯スト則自殺セントス郭嘉留テ之ヲ云春秋義
法不レ加干貴ト曹則髮ヲ切テ謝ス云曹カ士ノ
渴スルヨリ梅酸ノ渴ノ一ヲモ此時ノ一ヲナリ

○曹操カ将復侯惇危ノ目ヲ射ラレテ失テ拔ニ目ノ珠

鏃ト出シテ啖リ了リ曹性ヲ鎗ニテ突殺ス
呂布カ
将ナリ則眼ヲ射タルモノナリ

○云徳敗ニテ劉安カ処ニ宿ス劉安密ニ女房ヲ斬
殺シ狼ノ肉ナリトテ云徳ニ飽シム

○禰衡大ニ曹操ヲ罵ル後黄祖カ処ニ一行ヲ罵言テ殺サル
○董羨カ奴秦慶童ト云者雲其ハ云妾ト私ス董羨
怒テ鞭ヲ打タリ秦慶則曹操ニ告ク仍レ之ヲ大鑿吉平
責殺サレ董貴妃ヲ勒死シ董羨等族ヲ殄

○董貴妃ハ董羨カ女羨ニシテ孕五月
○孫策干吉仙人カ妖ヲ惡テ殺之種々奇怪アリ其

後干吉カ白帝ニ見ユ孫策大ニ悪ク病テ死ス

干吉鏡ノ中ニアラハレケレハ策鏡ヲ地ニ拗ステ妖人ト

一声サケビケルカ金瘡悉ク破レテ昏絶シテ死ス

○袁紹カ勢ノ山一上ル時一度ニ祭石車ヲ拽動シケレバ
車ノ上ヨリ鉄炮逆リ出大石空虚ニ踊リ揚ルト云

○孔明始テ劉備ニ見ル歳二十七

○曹操秘藏之名劍ニ青釭ト云アリ趙雲是ヲ得テ
人ヲ切ルニ金石タマラズ

○孔明七星壇ニ東南ノ凡ヲ祈ル

○周瑜悪孔明才智度々欲殺之

○劉備呉ニ至リ孫權カ妹呉夫人ヲ嫁スト云云
玄德

殿前ニ立出テ從者ノ帶タル劍ヲ取り天ニ祈シ云吾再ヒ

荆列ヘ皈ルベク此石ニナレトテ切ルニ火ノ光逆リ出テ

大岩ニツトナル

○周瑜為孔明苦メラレ死ス三十六歳建安十五年冬

十二月初三日也

○馬超大ニ渭水橋ニ戦テ曹操ヲ破ル曹操紅袍ヲ
又ギステ髯ヲ切テ走ル

○曹操右ヲ酌テ今ニ準ヘ孫子十三篇ニ擬メ孟徳新書

作ル張松一ヒ覽テ暗誦一字モ夕ガハス楊修感伏ス

○黄權諫劉璋迎ニトク徳ヲ於蜀ニ衣ノ裾シロニ咬ヘ再

ニス劉璋怒リ衣ヲ拂テ起ケレハ權カ向フ齒ニツ

引拔タリ 王累ト云者自ラ繩ニテ倒ニ首ヲ縛リ城
門ノ上ヨリ下リ午ニ文ヲ持テ一午ニ釵ヲ持テ諫ム劉
璋闔カス王累自ラ繩ヲ断テ地ニ落碎ケテ死ス
○ 曹操漢ノ天子ニ代ル一シ荀彧程昱崔琰皆諫テ死ス
○ 尤慈字ハ元放道号ヲ烏角先ト云者種々ノ幻術ヲ
シテ曹操ヲ驚シム

○ 華陀療ス闕羽肘ヲ肉ヲ割骨ヲ刮リテ毒ヲ去リ線ヲ
以テ口ヲ縫了ル血流レテ盆ニ溢ル雲長其ヲ圍テ談
笑自若タリ華陀大ニ感ス

○ 闕羽節ニ死ス云云呂蒙死灵ニ責ラレ七竅ヨリ血逆
死ス

○ 闕羽首ヲ吳ヨリ曹操テ遣ス云云面平日ノ如ク髪モ髯
モ悉ク動テ神威ナラ生ルカ如クナリシカハ曹操驚テ
地ニ倒ル良久シテ人心地付ト云、

○ 曹操闕羽ヲ葬リ之後毎夜睡ントレバ闕羽目ノ前
ヲ離レズ現レケル云云心ノ内安カラズト

○ 建安二十五年春正月下旬曹操死ス 云十六歳

○ 張飛性酒ニ酔躁暴ナリ午下ノ士ヲ鞭テ辱ムル一
夜ナリテ下ノ大将范疆張達ヲモ四十杖打セタリ
故ニ二人竊ニ張飛カ酒ニ酔卧シタルヲ伺ヒ首ヲ打
落シテ吳ノ国ニ降ス張飛五十五歳

○ 孔明蜀ニ入ル時漁腹浦ニテ石ヲ排メ陣勢ヲ布キハ陣ノ

八月二十三日也

○孔明遺^メ計^ヲ斬^ル魏延^ヲ

懿

○達東ノ公孫淵謀及シテ司馬懿カ為^ニ死ス前表^ニ匹ノ

犬怪キ頭巾ヲ戴キ紅衣ヲ披^キテ人家往來ス城南ノ百

姓飯ヲ炊ケルガ釜中ニ一人小兒蒸シタル死骸アリ襄平

北ナル市ニ俄ニ大ナル陷坑^ヲ出来テ内ヨリ死人肉ヲ出ス太^{アトサ}

二三尺五体^ニ備リテ却テ手足ナシ往來ス切^レト射^レト

更ニ透^トラスト云、

○曹氏三族ヲ夷セラル、^{曹爽カ}曹文叔^{徒弟}カ妻令女^夏

氏ノ女先ニ寡トナリ再^ラ截^テ外一嫁セサル^{コト}ホシ曹

爽カ家ニ養ハレ居タリ今般曹氏ノ縁ヲ切^テ他人ニ嫁セ

シメント其父云ニ又鼻ヲ切ル云仁者ハ成皿衰^シ以テ節^シ

不改義者ハ存亡ヲ以テ心ヲ易^カスト云、司馬懿大感^シ

一人ノ子ヲ令女カ養子トメ曹氏ノ後トス

○天和元年八月朔日大風吹テ江水湧揚リ平地水深キ^ト

八尺吳主代々陵墓種ル所ノ松栢コトクノ根ヨリ拔^テ

凡ニ吹シテ建業城ノ外ニ飛来リ道ノ畔リニ倒^ニ立

○吳ノ諸葛略殺サル、時中堂ニ坐シタルニ忽然トメ麻ノ衣^ヲ

披テ孝ヲ掛タル者一人出来ル恪云何モゾ忌々シキ
体ニテ来ルト叱ス彼者大驚云某カ父近比亡ヒタリコ
故ニ僧ヲ請セシタメ茲ヲ寺ト思ヒテ来ルト云恪門ヲ守ル
者ヲ召テ問ニ更ニ如此者不スト云、弥ク怒テ數十人番
人ヲ皆斬殺ス其夜陰風習々トメイツクトモナク哭音耳ニ滿
今朝殺シタル麻ノ衣ヲ披タル者數十人軍士ヲ伴来リ恪カ
頭ヲ掴テ命ヲ索ム恪地上ニ倒シ良久シテ甦リ早天ニ
起テ湯洗ヒ口嗽クニ其水甚血腥ニ幾度カサセテモ同シ
恪甚怒リ侍婢ヲ切テ衣服ヲ披更ニトスレハコレモ血腥メ

數十度披カユレ正眞ヤスト云、恪殺ル、毒不知房内ニ居
タルニ侍婢一人外ヨリ来リ遍身血ニ汚ル目ヲ怒シ牙ヲ嚙高
躍リ其頭梁ヲ撞キ吾ハ諸恪ナリ今日奸賊孫峻ニ出シヌ
カレ殺レタリト叫フ

○魏ノ郭淮カ射ル失シ姜維弦音ヲ聞テ身ヲ避ケン失ラ中ニテ
トリ郭淮ヲ射ル

○司馬師引出ニ於張皇后東華門ニ以練帛勒殺是乃
曹操カ餘リニ漢ノ獻帝ヲ惱シ伏皇后ヲ殺シタル酬ヒ子孫ニ
及ビケルト

○ 文鸯一騎破魏兵云、司馬師色シ失心内火焼ルカ
如ク目珠瘤ノヨリ逆出血流テ泉ノ如ク痛堪ガタカリシカ
氏諸軍ノ乱テラ恐レ被ノ端ヲ咬ノ齒ヲ切り忍フニ被ハ皆
咬爛レケリ

○ 司馬師瘤痛イコク重メ毎夜夢現トナク太子豊。張緝夏
侯玄床ノ前ニ現シテ去心神悩乱スト云、正元二年二月瘤
口ヨリ眼睛逆リ出テ死ス

晚禪

○ 蜀劉禪晩年昏媾酒癡政道佞人黃皓實ニ蜀ヲ滅
晋ヨリ攻ルヲ姜維表ヲ上ルニ黃皓欺テ秘ニ成都内年

老タル神降シ娑アリトテ宮中へ請ニ吉凶ヲ言シム

○ 蜀ノ江油城ノ大将馬邈鄧艾ニ降ラント欲ス女房李氏甚

怒リ耻シテ夫ノ顔ニ唾ス馬邈イト静ニ拭赤面閉口セリ

而降ル鄧艾又ニ李氏ハ首ヲ勤テ死ス鄧艾感ニ厚ク葬シム

○ 蜀中ノ簿書ヲ鄧艾カ方へ送スシメラルルヲ家數二十八万

男女九十四万人軍兵十萬二千人官吏四万人兵糧四十万石

金銀二十斤錦綺絲二十万匹

○ 姜維心痛テ死ス首ヲ自シ劊五十九歳 姜維一計害

三賢 三賢ハ鄧艾 鍾會 劭忠ナリ

○司馬昭酒宴ヲ設テ劉禪ト宴ス甚ク先情ニテ昭カ
タメニ大ニ笑ハル卻正教ヘテ禪ニ泣シムレ臣淚不出

○吳ノ佞人岑昏ヲ吳ノ士信中ニ入テ拽裂ニナ其肉ヲ一
口ツ、食テ快カナト喜フト云、

○吳西列四十三郡三百十三縣家數五十二万二千軍吏三
万二千軍兵二十三万男女老少二百三十万米穀二百八十万石
兵船五十余艘後宮ノ美女五千余人悉ク王濬カ手ニ属ス

○通俗元明軍談二十卷 宝永二同板

○韓山童カ家ニノ妖鏡アリ凡香ヲ燒花ヲ供ヘテ見レハ
官トナリ吏トナリ庶民軍士ノ象ヲ見ハス若シ怠慢スル者ア
ツテ看レハ禽獸ノ形ヲ見ス

○采石磯ニテ徐達カ詩ニ畧 胸勺

金戈渡水月還正 鉄馬升岡雞未啼

○明ノ花雲擒レテ陳友諒カ前ニ引出サレ問答アリ而
降レト云花雲怒テ身ヲ躍テ立アカルニ縛ノ索尽ク
断ツ則守ル者ノ刀ヲ奪ヒ取テ左右ノ者五六人切リ
殺セシカ大勢ニ敵シカタク又縛フレ射殺サル 二十九歳

○ 諺ニ曰海枯テハ終ニ底ヲ見レトモ人死シテ心ヲ

知ラズ

○ 正陣シホテ 從陣カラメテ

○ 怪哉 天地震動雷電ニテ蘓列城中忽チ三十

六箇所眼前ニ震ヒ毀チケリ

是城ハ張士誠カコモル如ナリ張士誠茲ニテ頸ヲ縊

○ 昔ニハ呂布轅門ニ戦テ射テ紀陵ヲ伏スト云、常

遇春三百歩ノ外ニ一戦ヲ立サシメ三度射ルニ皆目中

シ違ヘス射中タリ呂珍張虬拜伏シ及ヒ朱暹等且

兵六万ヲ卒ニテ降ス

○ 通俗續 三国志三十七卷アリ元禄未ノ卯本ニテ

馬場信武編述ス王渾王濬大ニ争レ切シ起筆トシ

晋漢羅兵暫時平ナリニ終ル漢ノ劉涓一代ノ事迹也

○ 野野山ニ異獸アリ赤髮人軀獠牙アリ手自由ニテ飛

箭ヲ中ニテトム其長七尺餘爪ハ鉄甲ノ如ク三百斤ノ獸シモ

輕ク負テ崖ニ縁ル所ノ人穿山夜又ト名付クト云、孔叢

刺レ殺ス之ヲ

○ 趙王ノ兵敗ルニ敗ルニ齊萬年等ラトイ一匹壁人孫秀カ驕肆ナルニ

ヨツテ全勝ナシ云云張華囑^メ梁王^ニ孫秀ヲ殺サシム梁王
長史官傳仁孫秀ト睦キユヘ殺サレスト云、後ニ張華
三族ノ刑ニ罪ニタルハ孫秀カ恨ヨリ起ル

○ 梁王逼^リ周處飢ラ齊万年ヲ討シム周處茲ニテ

戰死ス

○ 僚佐

○ 晋孟觀謀^テ坑^ニ万年^ヲ殺^レス之^ヲ

○ 東哲ト云者楊駿カ臨晋侯ノ号ヲ圍^キ云ウ臨ハ上ヨリ
下ラゾムノ辞晋ハ當代ノ世ノ号也アニ太后父外戚祖
トシテ晋ヲ凌クノ理アラシヤ當世ノ禍ハ此人ヨリゾ起

ラント難ヤシカ果メ其ノ如クナリ

○ 省ヤクシヨ

○ 晋惠帝太子遹^ニ淫佚奢侈甚シ於^レ是太子舍人杜錫

諫^レ之太子怒テ綉^ス針^ヲ坐^シ褥^ノ内^ニカクシ坐セシム時夏月

衣^カ襦^單ヘナリ針ノ鋒^ヲ肉^ヲ刺スト云、

○ 賈后藥燒^ク五香酒ヲ太子遹ニ飲シメ心魂^ヲ蕩スト云、

賈后^且潘岳^ヲ太子ノ上ラオカシアナトル口詞ノコ、口ヲ書

シム潘岳辞ス賈后怒怒テ曰然ラハ汝ナレズ常ニ宮

中ニ出入リテ娘々ラハ昌シ犯スマトク潘兵則書之ト云云

○ 王衍上表シテ太子トノ婚ヲ絶ツト云、王衍カ次女惠

凡負節ヲ守リテ王行ニ從ハズ

○孫慮藥ヲ舂ク杵ヲトリ出シ大子ノ腦門ヲ撃テ大子
眩テ倒ル、之毒酒ヲ以テ口ニ灌ギ入ル七孔ヨリ血溢
一言ニモ及バズシテ死ス

○竹林ノ七賢虚名ヲノミモテハヤス大子新ニ死スレモコレヲ
聽ガル者ノ如シ晋ノ政ノ衰ヘタルハ實ニ王戎ヨリ始ル
○趙王侁ニ潘岳書レ詔リシ金墉城ニ遣シ賈后ヲ毒殺ス
○一雄雉飛来リ大極殿ノ東塔ヨリ正殿ニ上ル而不
見ト云、又異鳥ヲ得タリ此名ヲ知ル者ナシ或曰小童
一人忽然ト走り出テ此鳥ヲ服劉鳥ト云ト云、小兒ノ

出来ル処ヲ穿ダスルニ知ラスト云、小兒ト鳥ト密室ニ
入テ守ラシムルニ明且鳥ト小兒ト氏ニ行方ナシ鎖ハ
モトノ如シト晋終ニ劉涓ニ服セラルヘキ前兆ト云、
○膏梁豎子

○韓擲達ニ金竜城云、韓嫗ト云寡婦椽樁ノ傍ヨリ
一ノ巨卵ヲ得タリアタムル一二月余ニテ殻開ケテ内ヨ
嬰兒出ツ四歳ニナル片尋常ノ十六七ニ見ユト云、
城成テ蛇ニ化ス

○衙ヤクニヨ

○襄陽ノ子母砲トテ大ナル石火失シト云、

○ 晋ノ鷹^{カク}ト云者連珠貫射ノ術ニテ劉靈^{エイ}射ル劉靈
一午^{カクテ}ニ取レ之又間モアラセス面前ニ射来スラ急ニ首ヲ
側テ一口ニ咬^ミ住ム

○ 教場

○ 甲陽軍鑑辨疑三卷アリ跋ニ云宝永二仲秋
於武陽長井庄隱宿自贅書尾ト云、上中二
卷ハ軍鑑ニ年月等ノ相違アルヲ多ク論テ甚夕
斤タリ下卷ニ至テ皆是傳アリト云テ甚夕軍鑑ニ實ス
其内一二ヲ抄ス

凡上杉武田ノあはれ統テ川ニ舎ルものこと其事實
ささ如之け統テ川ハ信列の国中と流となすと彼陸
奥の阿武隈川ニ同し然ルニ即ち統テ川との記ニテ
そ村名ヲのち源軍鑑ニ往々めけと多しこと下り世ニ統
テ川と云テ何と云と云テ源是は書の惑視之取録

四年河中傳ノ戦と号セルモ亦然リ支川中宮と云ハ
郡と云ハ所ナリ其仲ニ郷アリ邑アリ里アリ村アリ
いつまゝに戦場多しと不承たり六武居地と云テ村
号と不承りしニ為テ軍艦と號ラ奉ルハ誰惑セラレテ
其意と不悟ラ奇文と視テ之類と不生ハ彼我ヲ建テ
是也と起シ論之と亦慨ラらんヤ

信玄武州野原農圃遠山のゆき山と云ハ住居希菴也
と稱侍ス是唯香策彦と云ハあるの舉一より依テ
訛然希菴故有リテ求ニ應セズハ後作アリ世ニ不承知と云 信玄大ニ
懐リ遠ニ秋山他考古晴をニ命シテ霧又間士と云

希菴と殺ス本書ニ不記之末書ニ亦世間士の姓名ニ
至テ載きりしと云

言坂源正死後ニ其家士春日勘次郎ハ軍艦ヲ續クと
云、天正十三己酉二月ヲ記シテト

信州戸石の戦に山平晴幸大里ノ松術と行テ敵
と云テ南ニ向けしゆの邊ニ信玄孫村と云ハ古本

不載之近來多ク本文ノ彼郷ニ大里の社と云テ一云ラ
中ニ加ト云ハ

常の条に云ハ是全ク好人語を信シテ誤謬と
不承ト民昏墊シテ淫祀多ク知と云

従是不論ニ本書之偽託ニ而用テ明ニ兵学之良幹ト云

凡甲陽軍鑑ハ小懐景憲の編ル所アリて實ハ高坂ウ
著スル所ハ源ト云々景憲ハ文字にうまき此軍鑑と
傳書より其暨て之叔姪ノ親キに禪倍アリテ或ハ
右傳と引或ハ關章と軍鑑と全初と云々といひ
景憲ハ文字と不知人より源を秀月と云々といひ
高坂ニ讓ルと云々或紀ニ云々高坂は書と編ル歟又春
日と大森とニ合して傳云々といひ是等皆景憲
の所以なりといふ也其書中卷
乃ハ下卷。三韜本。彼己ノ卷。寒暑の二本。其書
景憲カ著スル所なり独り軍法之卷の云々高坂書

の遺書なり先生咲年ニ及て追加して下卷と撰ス
故ニ此書先生壯年ニ扈從する門人等ハ不詳ニ
年順以後の才子等ハ皆ゆきしりといふや景憲ハ文字
ありといふは傳あり

甲陽軍鑑古本と可用と云

一日平竹御文集七卷アリ勢列ノ産

俳名大紫教寓云堂三子内大渡友純

吳名湖山飛教人云不非形吞空

一豹とき、犬皮春 虎皮夏 鹿皮秋 馬皮冬

一蹴位玉素お村之吳獸と仰一昔ハ耕とといふ

實ハ羅ニゾニの年厚とあり

一宇位の大真サタのハ懐大真月移ると言大奈とあり

の池の蘆コモ之非翁と仰るゆりき(非物とき

一阿蘊ノ煙景云 三里の岨岨ヲ登ルとき頂上ニ煙洞

ニ池を底と云百方斗口の廣サ三百尋ヒロ津の温泉

浦ゆる久の古貴赤の二津之煙以元より立つるの
記と石雷のくく煙二里をきかたんえその冷く
二目も不なと云く

勢州戸抽の指とを毎年詮の古例あり南浦の名物
鯛と魚魚塩を沖に凝とゆめやある後陽に暖水
賜と寄むとハ流り舟口丁余の船門より込入り石巻
千重ニ集結とわつ次可也と云く二里の入江より
通と一側の丈綱めく指切りと云くや時と云く
浦の船艦殺千艘群連と返ると云く
出石田大場社。依田、交巡ノ物と云く、古買書松尾

まうりーころとハ口域そまの板極目醫はふ玉
をきいとのとくハ流れ口松二千名ニ這と云く
○天本三亥の古真那仙と首途一この年の卯又
月迄大旗又年程見抄一車順二年元禄二己の
年迄首尾七年ニ行跡如然一侍る凡そ往年
八百餘里と云く

○ 小田原の切り狭しで伊豆の行跡を尋ねし海と瓦母を搦山
と云ふ母れ一板府河の関こそ三の巻の傳家頼朝の
かられあひし一窟と云ふと云ふ

○ 碓氷山上下トキ 夢ねる志士の恩師。台山法性坊は
童風を一念三千の経廻と云うげ忽むうひの孕

峯母飛揚り末代村生のうまに。仙秀不滅の白雲
山。石塔古妙傳大指祝と云うれうまと云ふ

○ 戸隠山の閑窓 三諦クハクのまの申も奥院ノ天若アマテ
のひ。思シ兼ニ非ニ兒ニ。勇ユウ極キョクよ力リキ雄ユウのま。明アカサシテ窓サの戸ノと
幼き放ち信州高岩に提ツケケ。沙サ自ジ非ヒ七シチ寂ザク寞モク金キン剛ゴウの
窟内ニ霞籠り合津不粘固力にして九段竜槍
現ミコトと云えれしとて非ヒ嘉カと童コ苑エンの曉トキみ初ハジし。庇ヒ
生ガサの八ヤチ苦クにうかり之コト勢セと号ナしと云ふ

○肥後の温泉の地獄湯も長く変り又後さる熱湯
多きより涌出るる後行も又も新し一里半の
山のほとに幾千といふとと志く候とき

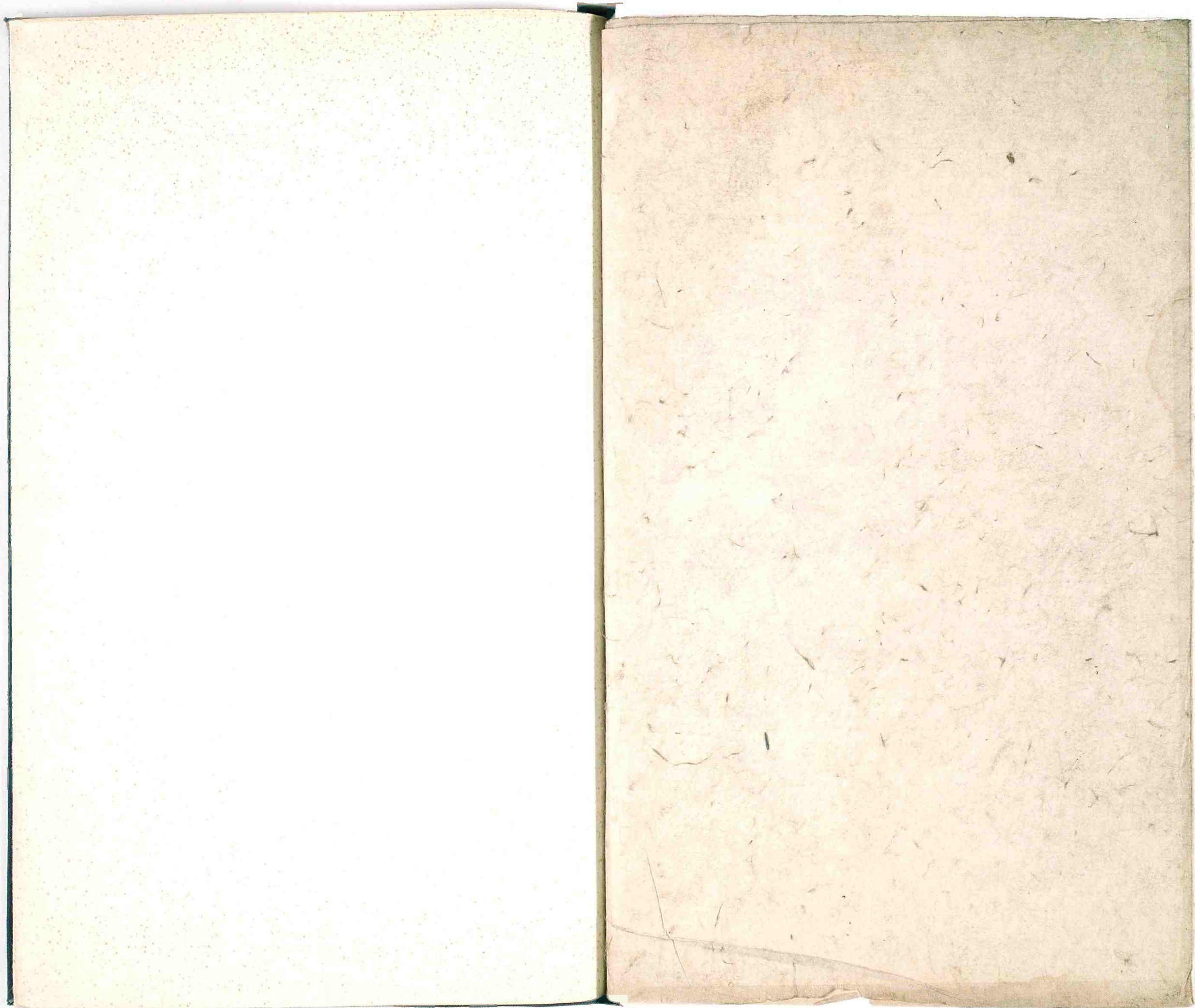
○長崎と云、巧業政所と云、長二十六七名換十八九
月、四重の階樓あり彩々の奇麗文の帆子やの
総儀半車探らとそ非変自在なる候之玉一の
尺ゆへ是に射スベキハ本船の富士の舟ハ改り候とき

一今村焼の土物と潤之四山之行け山皆白妙の志玉山
お屋千軒作り堂十登百口五ヶ弁を印の少屋ハ
兼ふよと改り候

一石ん玉屋濃郡田村と云小野といふ処ニ社あり世傳云
今の社主ふ所を祀 賀多。羅衣といふ史ぬ家の
置み村ありけ後り化童有り是別人丸こと云、
但三人丸の系あるりと柳事と伝々の筆跡不思議の
形之他事接みありす印本とらふととり

鳴門 正月十二日の夜もかきとぬりや鳴門
をりんと案内と独と伝して一里半の峯路羊腸と

まろり二十余町の岬輪之遠と多ざり十丈斗峙タル
アノ肩ニ打襄リ然拵者布らうらうら^{ナルト}の^{ナルト}子^{ナルト}衆と宛^{キコラ}
踵^{クニス}の^{クニス}らに^{クニス}んふむらひハ列^ム撫^ヤ養^ムの^ム崎^ム子^ムとく^ム程^ム之^ム
とや^ム漸^ムと^ム埃^ム解^ムと^ムる^ム色^ムを^ムら^ムや^ム山^ム海^ム浜^ムと^ムも^ムう^ムく^ム輪^ムと^ム
鳴^ムる^ムや^ムあ^ムす^ムら^ムや^ム西^ムの^ム海^ム原^ム見^ムる^ムく^ム七^ム尺^ム余^ムり^ム脹^ム言^ムが^ムけ
み^ムし^ム山^ム陽^ム西^ム南^ムの^ム後^ム息^ムは^ム十^ム八^ム町^ムの^ム喉^ム又^ム危^ムり^ム危^ムし
喘息^ムは^ムる^ム名^ムを^ムせ^ムハ^ム震^ムさ^ムし^ム理^ムり^ム可^ムり^ムは^ム申^ムほ^ムふ^ム二^ム丈^ム斗^ムの^ム
思^ム危^ムあり^ム一^ム寸^ムの^ムひ^ムま^ムに^ムは^ム思^ム改^ムと^ム激^ム潮^ム打^ムと^ム次^ム深^ムと^ム
層^ムの^ム瀉^ム動^ムき^ムあ^ムひ^ムて^ム千^ム輪^ムの^ム雷^ム車^ムと^ム一^ム言^ムあ^ムれ^ムよ^ムら^ムや
肝^ム魂^ムも^ムく^ムる^ム事^ムと^ム水^ム煙^ム原^ム山^ムと^ム壁^ムを^ム波^ム嵐^ム輪^ム室^ムの^ムい
さ^ムら^ムひ^ム刹^ム那^ム女^ム竜^ム門^ム千^ム尺^ムの^ム瀑^ム布^ム送^ム夫^ム女^ム流^ム。那^ム知^ム三
石^ムの^ム飛^ム湍^ム浪^ム漢^ム母^ムち^ムら^ムあ^ムら^ムと^ム灘^ム谷^ムの^ム巴^ムへ^ム左^ム右^ムに
沢^ムク^ム淵^ム穴^ムの^ムぬ^ムく^ムさ^ムハ^ム金^ム油^ムも^ム足^ムぬ^ムべ^ムと^ム追^ムく^ム河^ム舟^ム
渌^ム変^ム驟^ム合^ムく^ムち^ムら^ムあ^ムら^ムと^ム追^ムく^ムる^ムそ^ムれ^ム他^ム波^ムの^ム畦^ムハ
千^ム石^ムサ^ム拱^ムの^ム白^ム竜^ムし^ムと^ムあ^ムら^ムら^ムと^ムさ^ムら^ムハ^ム金^ム翅^ムも^ムこ
こ^ムら^ムや^ム未^ム食^ム後^ムは^ムく^ムふ^ム涌^ムる^ム波^ム既^ムハ^ム鯉^ム魚^ム鱗^ムと^ムらん
み^ムら^ム。適^ムレ^ム大^ム膽^ム翁^ムも^ム粵^ムに^ム危^ム言^ムの^ム釣^ムと^ム投^ムま^ムう^ムり^ムや
是^ムハ^ムハ^ム隣^ム濱^ムの^ム漁^ム吏^ムハ^ムい^ムと^ムい^ムさ^ムハ^ム船^ム艦^ム聖^ム陰^ムの^ム
袖^ム筵^ムと^ム翅^ムあ^ムら^ムく^ム只^ム船^ム艦^ムの^ム織^ム罽^ムと^ム追^ムま^ムう^ムら^ムり
と^ムく^ムい^ムそ^ムく^ム喘^ム度^ムあ^ムら^ムく^ムさ^ム瀉^ム穴^ムの^ム水^ム谷^ムと



愛 知 県



1103280332